

第640回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2022年2月度 ——

◇ 開催日

2022年2月21日(月)

◇ 議題

<ラジオ番組>

「ありがとう福岡国際マラソン あの名場面をもう一度」

放送日時：2021年12月31日(金) 20時～21時

◇ その他

「新型コロナウイルス」感染防止のため、リアルとオンラインを併用して開催。

九州朝日放送株式会社

第640回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2022年2月21日(月)午後3時25分～4時35分
2. 開催場所 「新型コロナウイルス」感染防止のため、
リアル(九州朝日放送 本社7階A会議室)とオンラインを併用して開催。

3. 委員の出席

委員総数 8名
出席委員数 8名

委員長	赤木由美
副委員長	石橋和幸
委員	丸石伸一
委員	田川真司
委員	上野恵梨奈
委員	中山裕二
委員	石井靖子
委員	藤村まこと

欠席委員数 0名

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和氣靖
執行役員	岩村智
報道情報局長	柴田高宏
総合編成局長	大保一
総合編成局 総合編成部	高柳徹
総合編成局 スポーツ部 プロデューサー	酒井明宏
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	園田哲也
番組審議会事務局(視聴者・広報室)	松永俊郎

4. 議題

- (1) ラジオ番組 「ありがとう福岡国際マラソン あの名場面をもう一度」
放送日時：2021年12月31日（金）20時～21時
- (2) 2月・3月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (3) 1月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (4) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

番組全体に対して委員からは、

- 伝説の選手の肉声や実況アナウンサーの証言とともに、記憶に残る名場面を紹介し、世界一と評されてきた福岡国際マラソンの価値が十分に伝わる内容だった。幕を閉じた年の暮れの放送で、過去をしみじみと振り返る大みそかの夜にふさわしい番組だった。
- 幼い頃によく観戦に出かけた福岡国際マラソンが来年から見られないことが確定した今になって、世界の一流選手の走りを見られることがどれほど贅沢なことだったかと強く感じた。思い出ある大会の名場面を振り返ることができて嬉しかった。
- マラソン好きには間違いなく楽しめる番組だった。当時の実況を聴きながら情景が思い浮かび、ラジオならではの想像力をかき立てる効果もあった。マラソン好きでもなくても興味を持てたし、リアルタイムではないシーンもどこか胸が熱くなるのを感じた。
- 大会の歴史が長いぶんリスナーそれぞれの興味がある時代も違うだろうが、多くの人が共鳴できる内容だった。年配の方は瀬古さんや中山さんの時代が懐かしかっただろうし、若い人は最近の日本人選手の活躍に興味を持てたのではないかと。豊富な音源と多くの取材やインタビュー、当時の裏話が番組に厚みをもたらしていた。
- 実況音源は臨場感があり、激しいレース展開やランナーの表情が目には浮かぶようだった。沿道の声援や拍手から福岡の人たちに愛された大会の盛り上がりもしのばれた。
- 出演したアナウンサーの声が美しく、安定した語りは耳心地も良く感動した。特に瀬古さんとの会話は映像でも見たくなるほど愉快で人柄が伝わった。今だからこそ語れる秘話は楽しく興味深いものだった。
- 番組の最後は、宗さんによる振り返りと自身の思い出話で締めくくられていた。福岡国際マラソンが果たしてきた意義や世界の陸上界における福岡の存在感の大きさも含めた話しは興味深かった。
- 番組で紹介されたエピソードを聴いて改めてテレビやラジオの存在価値は大きいと感じた。とりわけ、ラジオの強みは災害時や視覚障害者の情報源として無くてはならない存在であること。福岡国際マラソンの実況が無くなることは寂しいが、様々なスポーツ中継や防災・災害情報で特徴を生かした放送を継続して欲しい。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 世界一とされた大会を振り返ることは、日本や世界の陸上界の歴史をたどるのと同じ。そうした視点をより強調すればもっと番組の意義を高めることができたのではないか。
- 1つか2つのレースを節目の大会と位置づけ、実況音源を長く流すなどすれば、レースのおもしろさが深く伝わり、大会や長距離界の変化への理解も深まったのではないか。
- 興味があるリスナーにはいいが、内容が少しマニアックだった。市民のインタビューなども交えた市民目線の構成でも良かったのではないか。中継の苦労話や実際に起こったハプニングなども紹介して欲しかった。
- 大みそかの夜8時からの放送では一般リスナーには届きにくかったのではないか。もう少しみんなが聴きやすい放送日時にして欲しかった。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 本作は最後の大会前日に放送した内容を一部リメイクして大みそかに放送したもの。大会前日の放送から大会当日の中継へ、というストーリーの一つだった。大みそかに放送した本作では、最後の場面に近藤アナウンサーと宗さんによる大会の総括を加えた。
- テレビ中継はテレビ朝日と一緒に制作しているが、ラジオは約60年間、KBC独自で放送を続けてきた。アナウンサーも制作スタッフも非常に注力してきた番組だったので、その熱量を今回の番組に込めたいとの思いで制作に当たった。
- 視点の置き方や構成についてはご指摘の通りだが、歴史ある大会を1時間にまとめるのは苦労した。全大会の全音声が残っているわけでもなく、どの場面、どのレースをピックアップすれば、より多くのリスナーに興味を持って聴いてもらえるか吟味した。
- KBCのスポーツ中継は伝統的にその競技を正面から見つめてとことん追及する。「玄人ウケ」するスタイルは「マニアック」になってしまう側面もあるとの葛藤はあるが、本作はこうしたKBCの伝統を引き継ぐ形の番組だった。
- 「市民目線の構成でも良かった」というご意見はそのとおり。(中継の)準備のためスタッフで42.195^キメートルのコースをまわり100メートルごとのポイントを確認する作業等の苦労談も交えたかったが、多くの要素を取捨選択せざるを得なかった。

などの説明をしました。